

## 二種類のES型心理動詞とその意味構造について —「考え込む」型と「思い込む」型—

袁 曉 犇

キーワード: ES型心理動詞、意味役割、意味構造、程度進行の「～込む」

### 要旨

本稿は、従来日本語ES型心理動詞の語群に含まれていない複合動詞も対象に含め、考察を行った。考察を通し、「彼は嘘を真実と思い込んだ」のように、「思い込む」における対格名詞句で表される「感情の対象」はト格名詞(句)や引用句などによって補われることと、その対格名詞句は典型的なES型心理動詞の意味役割と異なる含意を有すること、という二点から「思い込む」の持つ意味役割を「被動者」と「擬似的な感情の対象」と新たに呼ぶことにした。これをもとに日本語において二種類のES型心理動詞があることを述べ、もう一つのES型心理動詞の意味構造を新たに提案した。さらに、ES型心理動詞の意味構造をもとに、松本(1998)で指摘している移動を表さない「～込む」における方向性の問題と絡めて議論をした。

### 1. はじめに一複合動詞である二種類のES型心理動詞—

本稿は従来日本語心理動詞の語群に含まれていない複合動詞も考察の対象に、二種類のES型心理動詞に分ける必要があることを提案し、もう一種類のES型心理動詞の意味構造を新たに提案する。まず、心理動詞について概観する。心理動詞とは、Grimshaw(1990:8)によれば、以下(1)のように心的感情を抱く「経験者(Experiencer)」が、主語位置(1a)あるいは目的語位置(1b)に現れるかで、二つに分類されるといふ。

(1)a. They fear thunder. < Experiencer, Theme >

b. Thunder frightens them. < Theme, Experiencer >

経験者の統語位置における違いによって、「経験の対象(Theme)」も目的語位置(1a)あるいは主語位置(1b)に変わる。本稿では、Grimshaw(1990)に従い、(1a)タイプを「ES(Experience subject)型」心理動詞、(1b)タイプを「EO(Experience object)型」心理動詞と呼ぶことにする<sup>1</sup>。

この二区分のうち、EO型心理動詞における項の配置は主題役割付与均一性仮説

(UTAH)<sup>2</sup>に違反するリンキングの現象があるため、研究者から多くの関心を集めている(Grimshaw1990、丸田1998、など)。一方、ES型心理動詞の場合、ほとんど他動詞と同様に扱われてきており、注目されてこなかった。ES型心理動詞が注目されないなか、日本語のES型心理動詞を包括的に扱う研究として三原(2000)があげられる。三原(2000)は単一動詞であるES型心理動詞の動詞の体系的分類における位置づけを明らかにしようとしている。日本語のES型心理動詞は以下(2)のようなものがあげられる。

- (2)ES型心理動詞:怖がる、悲しむ、喜ぶ、好む、あこがれる、困る、悩む、信じる、びっくりする、感動する、勘違いする、誤解する、など

しかし、日本語では心的感情を抱く経験者が主語位置にある動詞の中には、単一動詞のほか、複合語の語形をとるものも多く存在する。筆者はGrimshaw(1990)の定義に従って調査していくと、複合動詞であるES型心理動詞が以下の(3)と(4)があげられる。

- (3)(彼は)考え込む、ほれ込む、思い起こす、思い当たる、思いつく、思い迷う、考え付く、覚えこむ、悩み苦しむ、など

- (4)(彼は)思い込む、決めつける、思い違える、決め込む、など

(3)と(4)の複合動詞をみて分かるように、いずれも心的感情を抱くものが主語位置にあるため、ES型心理動詞としての特徴を持つと思われる。ただし、ここで(3)と(4)を区別しているのは、両者を精査していくと、異なる振る舞いを有することが分かるからである。本稿では、とりあえず(3)のタイプを「考え込む」型、(4)のタイプを「思い込む」型と呼ぶことにする。ES型心理動詞の多くは(3)タイプの「考え込む」型に値するが、(4)タイプの「思い込む」型は、やや特殊である。これはその語義において、一種の錯覚を表す心的感情であることから分かる<sup>3</sup>。そして、このタイプは数が少ないうえ、複合語の語形を取るものが多い。単一動詞とするものは、「勘違いする」、「誤解する」があげられる。

さらに、(3)と(4)のタイプにおけるもう一つの違いは対応する文構造である。文構造としての違いが顕著に表れるのは「考え込む」と「思い込む」である。ここで「考え込む」と「思い込む」を例に、それぞれの文構造を陸(2012)の調査に基づいて以下の(5)と(6)にあげておく<sup>4</sup>。

- (5)「考え込む」型: <人>ガ(<こと>ヲ)V

私は(解決策を)考え込んだ。

(6)「思い込む」型：<人>ガ(<こと>ヲ)<>ト V

彼がその嘘を真実と思い込んだ。

陸(2012)によれば、「考え込む」は(5)のように基本的に一項動詞として使われており、ほとんど対格名詞が現れない。まれではあるが、対格名詞が使われる例として「解決策を考え込む」があげられるという。そして、(6)のように「思い込む」は対格名詞句で現れる対象への判断の内容がト格名詞(句)や引用句などによって補われているものが用例全体の98%を占めているという。また、「思い込む」は、「私は(彼がいい人)思い込んでいる」のように、ト格名詞(句)を省略することも可能である。

以上のように、「考え込む」型と「思い込む」型は同じES型心理動詞であっても、表す心的感情が違っており、異なる文構造を有することが分かる。とりわけ、「思い込む」は、対格名詞句で現れる対象への判断の内容がト格名詞(句)や引用句で表される必要がある。このことから、「思い込む」型心理動詞における対格名詞句は一般的にいうES型心理動詞がもつ経験の対象と同質なものだろうかという問題が生じる。この点について、さらなる考察が必要であると思われる。

本稿では、以上の問題点を踏まえ、次の通り論を構成する。第二節では、まずES型心理動詞における意味役割を概観する。そして、意味役割の考察を通し、「考え込む」と「思い込む」に代表されるES型心理動詞の意味役割が異なることを指摘する。これに基づき、もう一種のES型心理動詞の意味構造を提案する。続いて、第三節では、「考え込む」と「思い込む」を例として、両者の意味構造をもとに複合動詞「～込む」における問題点について言及する。第四節では論全体をまとめる。

## 2. ES型心理動詞の意味構造

### 2-1. ES型心理動詞の意味役割

#### 2-1-1. 経験者(Experiencer)と経験の対象(Theme)

意味構造の考察に入る前に、まずES型心理動詞の意味役割について概観する。ES型心理動詞の意味役割が、その主語と目的語によって、経験者と経験の対象に分かれる点についてはすでに(1a)で見た。ここで、二つの意味役割の規定について確認しておく。まず、経験者についてだが、一般的に以下(7)のように感情を経験する本人が経験者である。この場合、(8)のように命令形ができないため、主体による意思性が見られない。そのため、「Agent(動作主)」と区別される。

(7)子供はその話を恐れた。

(8)\*恐れなさい!

そして、経験の対象についてだが、以下の(9)と(10)のように対格と与格の両方がある。

(9)子供はその話を怖がった。

(10)太郎は父の死に悲しんだ。

Endo and Zushi (1993)にれば、対格で表示される名詞句は「感情の対象(Target/Subject Matter)」であり、与格で表示される名詞句は「原因(Cause)」を表しているという<sup>5</sup>。本稿ではEndo and Zushi (1993)による経験の対象における下位分類を基本的に受け入れる。ただし、「考え込む」型と「思い込む」型の心理動詞における対格で表す感情の対象の内実が異なるを考える。この点について、次節で詳しく考察する。

## 2-1-2. 問題点:「思い込む」型における経験者と感情の対象

「思い込む」型の経験者を述べるまえに、「考え込む」型タイプの経験者について、(5)の「彼が(解決策を)考え込む」を例に説明する。この場合、「彼」は心的感情を体験する当人であるため、経験者である。そして、対格で表される「解決策」は直接の感情の対象である。これはとくに問題がない。問題は「思い込む」型タイプである。ここで(6)の「彼が嘘を真実と思い込む」を例に説明する。この文の解釈から、彼は嘘の内容について事実かのように思っていることを表している。対格で表される感情の対象である「嘘」の内容は、経験者の「彼」にとって「真実」であるという点に注意されたい。このような含意があるため、「彼」の持つ心的感情の対象は実質ト格名詞句である「真実」への思いになる。このような含意が生じた理由と意味役割への影響について、次のように考える。

「思い込む」の語義において、実際と違う内容をそれが正しいとってしまうことを意味する。このことから、(4)のような「思い込む」型心理動詞における心的感情は一種の錯覚という感情であることが受け取られる。本稿では、このような錯覚といった心的感情はES型心理動詞の理論枠組みに対し、重要な役割を果たしていると考えられる。なぜなら、錯覚という心的感情を引き起こすためには、感情の対象から経験者に何等かの心的な影響を与える必要があるからである。つまり、心理活動において、経験者が錯覚ということ認識できていない理由は、その錯覚が心理活動を行う本人にとって、いかにも錯覚ではないように働きかけているからであると思われる。たとえば、「彼は嘘を真実と思い込む」の例において、「嘘」の内容は「彼」にとっていかにも

「真実」であるようになっている。これを言い換えると、「嘘」という偽の内容は真の内容として「彼」の心的感情に働きかけなければならない。本稿では、この働きを感情の対象から経験者に対する反作用と理解する。そして、この反作用は「解決策を考え込む」タイプのES型心理動詞における感情の対象に見られないものである。「彼は解決策を考え込む」において、感情の対象である「解決策」から経験者の「彼」に対する働きが見受けられない。「思い込む」と類似する例はそのほか、次の(11)の単一動詞にも見られる。

(11)彼は私を誤解した。

(11)では、「彼」に「私」を誤解したという心的感情が生まれるのも、「私」が何かをしたから、「彼」にそういう思いをさせた必要がある。以上の内容をまとめると、「思い込む」型の心理動詞について、対格名詞句で表す感情の対象から経験者に対し、心的な影響という反作用を及ぼすことについて、その意味役割を「考え込む」型のES型心理動詞から区別される必要がある。これを踏まえ、本稿では、「考え込む」型が持つ経験者を「直接的な経験者」とし、「思い込む」型が持つ経験者は「Undergoer (被動者)」と呼ぶことにする。また、「思い込む」型における対格の感情の対象を「疑似的な感情の対象」とし、以下(12)と(13)では両型の意味役割をまとめる。

(12)「考え込む」型：＜直接的な経験者、感情の対象＞

(13)「思い込む」型：＜被動者、疑似的な感情の対象＞

### 2-1-3. 検証:「考え込む」型と「思い込む」型における意味役割の違い

前節では、ES型心理動詞における意味役割の経験者と感情の対象に二種類があることについて述べた。このような違いは言語現象と関わりながら検証を行う必要がある。ただし、経験者と被動者の違いは、ES型心理動詞を主語とする場合、語感上では非常にあいまいであるが、心的変化を蒙るか否かで区別される。主体役割が経験者の場合、主体が単に事象を経験する。一方、被動者の場合、主体が何かしらの影響を受け、心的変化を経験する。これは以下の(14)にみられる。

(14)a. He saw a bike.

b. He becomes sad.

(14a)は単にbikeが彼の視野に入ることであり、主体は経験者である。(14b)は、主体が何かしらの影響を受け、心的変化が引き起こされることが想定されるため、被動者である。そして、このような心的変化の有無は、その変化による結果継続の有無

にも言い換えられる。つまり、(14a)は一回の事象であり、bikeを見ることによって生まれた心的感情を抱き続けることがない。心的感情の結果継続を表そうとする場合、「He saw a bike which made him sad」のように従属節で表現しなければならない。一方、(14b)では単文において心的感情による結果継続が含意されている。このような違いを踏まえ、「考え込む」と「思い込む」を例に、両タイプにおける心的変化による結果継続の有無を検証する。これはまず以下の(15)と(16)の副詞との共起からみられる。

(15)深く考え込む。

(16)固く思い込む。

(15)の「深い」は表面(外)から奥までの距離が大きいことを表しており、表される距離が一定の幅として捉えられることから、結果としての読みが弱まる。一方、(16)の「固い」は容易に状態を変えないことを表し、結果状態であることに近いと捉えられる。そして、「固い」は「思い込む」のみと共起することから、「思い込む」のみ心的変化があることを示している。次に、心的変化の有無は、期間副詞との共起テストからも検証されるため、以下の(17)と(18)に見られる。

(17)一時間考え込んだ。

(18)\*一時間思い込んだ。

(17)の「考え込む」は期間副詞と共起するため、心的感情の過程を有する。一方、(18)の「思い込む」は期間副詞と共起しないため、心的感情の過程を有しておらず、結果継続を表していると思なせる<sup>6</sup>。

以上の二つのテストから分かるように、「考え込む」における心的変化について、その変化による結果を要請する必要がなくても成立する。一方、「思い込む」の場合、心的変化による結果を要請する。これは実際(5)と(6)における「考え込む」と「思い込む」の語義にも対応する。「解決策を考え込む」の場合、必ずしも解決策となるものを心に決める必要がない。一方、「嘘を真実と思い込む」の場合、心に真実であることを決める必要があるということである。

以上のように、経験者と被動者の違いにつて、「考え込む」と「思い込む」を例に、両者が共起する副詞との関係から検証を行った。検証による結果、および(5)と(6)における文構造の違いに基づき、本稿では日本語におけるES型心理動詞を二種類に分ける必要があることを提案する。これに基づき、次節では両型の意味構造について説明する。

## 2-2. ES型心理動詞の意味構造(鑄型)

### 2-2-1. ES型心理動詞の意味構造1

ES型心理動詞の意味構造について、三原(2000)によれば、日本語のES型心理動詞は事象的(Eventive)であることから、Vendler(1967)の分類における「活動動詞」に属するということであるという。しかし、三原(2000)によるES型心理動詞が活動動詞であるとの提案は、山川(2004)によって反論されている。山川(2004)は、ES型心理動詞がTsujumura(2001)による程度副詞「とても」による修飾が可能であることから、活動動詞と異なると指摘している。程度副詞「とても」によるテストを以下(19)と(20)のように示す。

(19)太郎はとても喜んだ/苦しんだ。

(20)\*太郎はとても走った/笑った。

(19)から分かるようにES型心理動詞は程度副詞「とても」による修飾が可能である。一方、(21)の動作動詞は「とても」による修飾が不可能である。この違いについて、Tsujumura(2001)は「とても」による修飾が可能である条件の一つが、その動詞の意味構造上にSTATEが存在しなければならないと指摘している<sup>7</sup>。つまり、山川(2004)によれば、Tsujumura(2001)の指摘が正しければ、(19)と(20)の(不)適格性から、ES型心理動詞を単に活動動詞に含めるのは問題であるという。ただし、ES型心理動詞は事象的な側面が存在することが三原(2000)によって説得的に論じられているため、山川(2004)はES型心理動詞の意味構造に、事象的な特徴とSTATE範疇も持つ折衷的な意味構造を提案している。ES型心理動詞における意味構造の詳細、および意味構造の規定については、山川(2004)を参照されたいが、ここでは山川による意味構造の簡略化されたものを以下(21)のように示す。

(21) [x EXPERIENCE[x BECOME [x [BE [AT PSCH - STATE<sup>8</sup>]]]]

山川(2004)によれば、ES型心理動詞は基本的に(21)のように経験者のxという一項述語を持つという。ただし、山川も指摘しているようにES型心理動詞は一項述語を持つだけでなく、二項述語を持つ場合もある。この問題を考えるにあたっては、丸田(1998:62-63)による指摘が重要になってくる。丸田(1998)では、心的感情を表す形容詞には、一項述語と二項述語の両方を用いられる場合があると述べている。そのうちの一例を以下の(22)にあげる<sup>9</sup>。

(22)a. He is angry.

b. He is angry at trifles.

(22a)は心的感情を表す一項述語である、(22b)は感情の対象が項として現れる二項述語である。(22)では一項と二項述語の変換が可能であることから、丸田(1998:63)は以下(23)の語彙規則を提案している。

(23)[BE[x PSCH - STATE]]→[ORIENT[x TOWARD - y]]

(23)は心的感情(一項述語)から心的方向(二項述語)に変換することを表すものである。矢印の左側の意味関数は(22a)と、左側は(22b)と対応する。そして、山川は丸田(1998)で提案している(23)の規則を援用し、ES型心理動詞が一項述語から、二項述語になった際の意味構造を以下(24)に示している。

(24) [x EXPERIENCE[x BECOME[x's - EMOTION ORIENT [[TOWARD y]]]]

山川(2004)によれば、(24)は(21)に(23)の語彙規則を取り入れた二項述語とするES型心理動詞の意味構造である。(24)におけるx's - EMOTIONは項xの感情であるという。

本稿では、丸田(1998)による語彙規則、および山川(2004)による意味構造の分析を基本的に受け入れ、「考え込む」型心理動詞に適応されると考える。「私が考え込んだ」のように一項述語とする際、(21)の意味構造をもつ。「彼は解決策を考え込んだ」の二項述語とする場合、(24)の意味構造を持つ。ただし、2-1-2節で述べたように、「思い込む」型心理動詞は「考え込む」型と異なる意味役割を持っている。そのため、対応する意味構造も変える必要がある。これについては次節で述べる。

## 2-2-2. ES型心理動詞の意味構造2

「思い込む」型心理動詞における被動者が感情の対象から心的影響を受ける点について、2.1.2節で説明した。ここで、その意味構造を明らかにするためには、EO型心理動詞の意味構造を参照する必要がある。これは、(1b)におけるEO型心理動詞の経験者(they)は経験の対象(thunder)から影響される点において、類似的な働きをしているからである。EO型心理動詞の意味構造について、丸田(1998:61)を紹介する。以下(25)の例をもとに(26)と(27)に示す。

(25)a. He is frightened of thunder.

b. 彼の振る舞いが私を困らせた。

c. Sue's remarks aroused us to action.

(26) [x AFFECT(=ACT ON)y]CAUSE [BE[y PSCH - STATE]]

(27) [x AFFECT y]CAUSE [ORIENT[y TOWARD - z]]



丸田(1998)は、EO型心理動詞がT/SM制約を受けるか否かで、(26)と(27)の二つの下位分類に分ける<sup>10</sup>。(26)は二項述語であり、(27)は方向づけを含む三項動詞である。(25ab)は(26)の意味構造を、(25c)は(27)の意味構造を有する。ここでxは経験の対象であり、yは経験者である。本稿では、EO型心理動詞の意味構造における上位概念である[x AFFECT y]CAUSEのみに注目し、「思い込む」型の意味構造を考える。その理由は以下の通りである。

(25b)のEO型心理動詞において、経験の対象の「彼の振る舞い」が経験者の「私」に心的な影響を与えるという働きがあることが見てとれる。この働きは2.1.2節で述べたように、「彼は嘘を真実と思ひ込む」における感情の対象の「嘘」から被動者の「彼」に対し、心的影響を与える点において、同様であると思われる。「彼の振る舞い」に値する部分は(27)と(28)では、[x AFFECT y]CAUSEと対応する。そのため、「思い込む」の意味構造にも[x AFFECT y]CAUSEを取り入れることが妥当であると考えられる。そして、CAUSEを含めた意味関数は通常意味構造の上位概念として現れなければならない。これらのことを配慮すると、「思い込む」型の意味構造を以下の(28)の例文に基づき、(29)に示す。

(28)a. 私は(彼がいい人と)思い込んだ。

b. 彼はその嘘を真実と思ひ込んだ。

(29) ([y AFFECT x]CAUSE)

[x EXPERIENCE[x BECOME [x [BE [AT PSCH - STATE]]]]]

(29)全体は(21)の意味構造にEO型心理動詞の上位概念を取り入れた一項述語である。x項は被動者である。そして、y項が表す疑似的な感情の対象は文に現れても意味格として認められないため、心理動詞が依然として一項述語である。そして、(29)は一項述語であるため、「考え込む」型と異なって、(23)の語彙規則が働かない。つまり、「思い込む」型タイプのES型心理動詞は二項述語にならないということである。さらに、疑似的な感情の対象を省略することも可能であるため、(29)における上位概念を括弧にいれ、ここで随意項と設定する。(28a)の場合、ト格名詞句が現れる際、もしくは省略される場合のいずれも、対応する意味構造は(29)では括弧を含めないものになる。単一動詞「彼は(私を)誤解した」の場合も同様な意味構造を有すると考えられる。そして、(28b)の場合、(29)における括弧を含めた意味構造を持ち、その際にy項は「嘘」と対応する。

### 3. 複合動詞とするES型心理動詞の意味構造

本稿では、複合動詞を含めたES型心理動詞を対象にしている以上、複合動詞と関連する問題についても述べる必要もある。ただし、ここでの説明は「～込む」を持つ複合動詞に対する個別の問題にとどめておく。

松本(2009)では、移動の意味を含まない「～込む」の場合、V1が主要部であるとし、多様な意味を持つと指摘している。「考え込む」と「思い込む」における「～込む」の役割は、松本(2009)によれば、次のような説明に該当するという。

(30) V1の表す状態変化が進み、ほかの状態に変わることができないほどになる(それが結果状態に入り込む)ことを表す。

松本(2009)では、このような「～込む」になんらかの方向性の意味が認められると指摘しているが、方向性についての説明は明確ではない。ここで、二種類のES型心理動詞の意味構造を見ると、松本(2009)でいう方向性も明らかになってくる。(21)と(29)において、ES型心理動詞が表す下位概念に [AT PSCH-STATE]があり、心的状態にあることを表している。これは位置変化における着点への到達[AT<Place>]と並行的に捉えられるため、なんらかの方向性を含意していると捉えられる。また、(24)では、感情の対象が項に現れる際に、ORIENTで表す心的方向性が、静的な方向性として認められるということである。つまり、松本(2009)では「～込む」になんらかの方向性があると一括しているが、本稿の分析からは意味構造上では方向性の内実が異なることが示唆されている。

### 4. 終わりに

本稿では、従来ES型心理動詞の語群に含まれていない複合動詞も対象に含め、考察を行った。考察の結果は次の二点にまとめられる。

- (i) 「思い込む」における対格名詞句で表される「感情の対象」はト格名詞(句)や引用句などによって補われていることと、その対格名詞句は経験者に対する心的の影響という反作用があること、という二点から、「思い込む」の対格が持つ意味役割を典型的なES型心理動詞と区別すべきと指摘したうえ、「考え込む」と「思い込む」の二種類のES型心理動詞があること提案した。
- (ii) 松本(2009)で指摘している移動の意味を含まない「～込む」は、なんらかの方向性を認めているが、そのような方向性は本稿では意味構造上の分析を通し、異なる心的方向であることを明らかにした。

## 注

- 1 本稿でいう心理動詞について、工藤(1995:76)では「内的情態動詞」(非内的限界動詞)と呼び、「外的運動動詞」(アスペクト有)と「静態動詞」(アスペクト無)の中間に位置づけている。さらに、内的情態動詞には、思考・感情・知覚・感覚動詞の四つの下位分類がある。思考動詞を心理動詞に含める考えは吉永(2001)があげられる。
- 2 UTAHとは、同一の主題役割を担う項は、D構造において同一の統語構造を持つ、というものである。しかし、(1b)においては、(1a)における経験者が目的語の位置に現れることで、UTAHに違反する。
- 3 (4)にある「決め込む」は多義性を持つ。ここでは、事実がどうであろうと、自分で勝手にそうだと決めることを表すものとする。
- 4 睦(2012)は、「程度進行」の「～込む」とする複合動詞を対象とし、「現代日本語書き言葉均衡コーパス」(2009年度モニター公開版)を用いて、複合動詞とその構成要素との関係を量的に調査したものである。調査の結果、「程度進行」を表す「～込む」は、前項動詞V1との関わりを持ちながらも、ひとまとまりの単語としてV1や「こむ」とは異なる意味・構文的な特徴を持つことが確認された。
- 5 「考え込む」と「思い込む」は与格と共起することもあるが、その語例が極めて少ないため、本稿では「原因」である意味役割について、考察しないことにする。
- 6 継続的な動作に対する変化の有無を考える際に、「一時間で」のような期限副詞との共起テストが多く使われている。ただし、瞬時的な心的活動を表す心理動詞について、期限副詞によるテストは有効ではないと考えるため、ここで採用しないことにする。
- 7 Vendler(1967)による動詞四分類とその意味構造を以下に示す。活動動詞の意味構造上では、STATEが存在しないことがみて取れる。
  - a. [状態動詞(State)]:[y BE<State>/At<Place>]
  - b. [活動動詞(Activity)]:[x ACT (ON y)]
  - c. [到達動詞(Achievement)]:[BECOME[y BE<State>/At<Place>]]
  - d. [達成動詞(Accomplishment)]:[x ACT (ON y)]CAUSE[BECOME[y BE<State>/At<Place>]]
- 8 PSCH - STATEは、PSYCHOLOGICAL STATEの略である。
- 9 日本語の語例について、山川(2004)によるものを次のようにあげる。
  - a. 太郎は後輩の変貌を悲しんだ。
  - b. 太郎は数年ぶりの大雪を喜んだ。
- 10 T/SM制約は、丸田(1998:31)によれば、いかなる述語も Causer項(原因)と T/SM項(感情の対象)を同時に実現することができないということである。

## 参考文献

- 工藤真由美(1995)『アスペクト・テンス体系とテキスト』ひつじ書房。
- 坂東美智子・松村宏美(2001)「心理動詞と心理形容詞」影山太郎編『日英対照動詞の意味と構文』大修館, pp. 69 - 97.
- 松本曜(2009)「複合動詞「～込む」「～去る」「～出す」と語彙的複合動詞のタイプ」由本陽子・岸本秀樹(編)『語彙の意味と文法』くろしお出版, pp. 175 - 194.
- 丸田忠雄(1998)『使役動詞のアナトミー』松柏社。
- 三原健一(2000)「日本語心理動詞の適切な扱いに向けて」『日本語科学』8, 54 - 75.
- 睦俊秀(2012)「程度進行」の意味をもつ複合動詞「V1 + こむ」の意味と構造に関する考察」『コーパスに基づく言語学教育研究報告』No.8, pp. 185 - 208.
- 山川太(2004)「日本語における心理動詞の格表示について」『日本語・日本文化』30, pp. 1 - 18.
- 吉永尚(2001)「心理動詞と語彙概念構造」『園田学園女子大学論文集』36, 109 - 118.
- Endo, Y. and M. Zushi (1993) "Stage/Individual - Level Psychological Predicates" H. Nakajima and Y. Otsu (ed.) *Argument Structure: Its Syntax and Acquisition*. Kaitakusha.

Tsujimura, N. (2001) "Degree Words and Scalar Structure in Japanese." *Lingua* 111, 29 – 52

Grimshaw, Jane (1990) *Argument Structure*. MIT Press.

Vendler, Z (1967) *Linguistics and Philosophy*. Cornell UP.